びわ湖ホールプロジェクト　三年間の報告と考察

岩村 原太（舞台芸術学科）
北村 英之（プロジェクトセンター）
濁川 友里恵（プロジェクトセンター）

一、びわ湖ホールとびわ湖ホールプロジェクトについて

（一）はじめに

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール（https://www.biwako-hall.or.jp）は一九九八年に、当時大阪市内の外では関西圏初の「本格的オペラ上演が可能な大劇場」として開館した。大津市琵琶湖畔（におの浜）埋め立て地に建設された建物内に、大ホール１８４８席、中ホール８０４席、他に小ホール、リハーサル室、ホワイエ、レストラン等を備える。初代芸術監督若杉弘氏（～二〇〇七年三月）、第二代芸術監督沼尻竜典氏（二〇〇七年四月～）。グランドオペラを主としたプロデュース作品上演のみならず、滋賀県南部における文化拠点としてバレエ教室や高校生らの発表活動も盛んに行われ、人気ミュージシャンや有名歌手、国際的演奏家のコンサートが多く催されるなど、滋賀県民に広く親しまれている劇場施設である。

京都造形芸術大学（以下、適宜「本学」と略称する）とは、開設期の映像・舞台芸術学科とその後の舞台芸術学科卒業生たちが少なからず就業先としてご厄介になっているほか、本学出身者の作品が上演されるなどのご縁が続いている。館を運営する財団にプロパー雇用された技術者は舞台技術部に所属し、オペラ制作、主催公演、貸し館対応の業務をこなす。びわ湖ホールの特徴のひとつはこの舞台技術部の態勢にあって、自らコンテンツを創作できる欧州スタイルの劇場として、今日では国内におけるオペラ制作の重要な拠点となっている。

（二）びわ湖プロジェクト開始の背景

この連携プロジェクトの始まりは二〇一三年十二月初旬、ホール職員として働く卒業生からの問い合わせであった。日を改めてびわ湖ホール技術部より3名の担当者を本学に迎え、学内施設（スタジオ教室、春秋座舞台）を案内説明。その後、舞台芸術学科の実習環境と授業カリキュラムを踏まえ、劇場の舞台技術部より、両者の業務提携あるいは事業連携の可能性を打診された。

内容は少々混み入って複層的だが、せっかく芸術系の大学と劇場で連携するのであればお客さんに伝える大切さも学べるように、びわ湖ホールが推進する（舞台芸術普及の取り組みを主な目的とした）地域活動の一環として、6歳以上18歳以下の方が対象の「びわ湖ホールシアターメイツ」の皆さんを招待した成果発表公演を開催したい。その内容は、過去にびわ湖ホールの公演として実施した「ワクワク☆ドキドキ♡劇場探検ツアー」の形式を採用し、この「劇場探検ツアー」の創作／製作に舞台芸術学科生たちの協力を得たいとのお申し出であった。加えて提携あるいは連携の実現時には、本学内施設とは異なる性格の大規模ホールを使った実習やびわ湖ホール職員によるレクチャーも計画できる、とのご提案もいただいた。

このお申し出とご提案の背景には、びわ湖ホール舞台技術部が担当する「びわ湖ホール舞台技術研修」の計画（公益社団法人日本芸能実演家団体協議会＋公共劇場舞台技術者連絡会～文化芸術の振興に関する基本的な方針、施設の安全な環境整備）、さらに劇場施設として地域文化の担い手である大学との関係づくりを検討する運営セクションの新姿勢（平成二四年施行「劇場・音楽堂等の活性化に関する法律」）が存在している。

いわゆる「貸館事業」に安寧する公立館運営が「ハコモノ行政」と批判され、二一世紀型の公共館像を確立しなければならなくなった二〇〇〇～二〇一〇年代の行政課題に対する回答の現れとして、びわ湖ホールでも「自主事業」を核に「貸館事業」や「共催事業」など様々な活動が計画実施されたと聞く。そうした変革のうねりの中で、運営の一翼を主に舞台管理運営業務から担う舞台技術部でもこうした普及活動に携わる必要が生じた経緯を踏まえれば、このお申し出とご提案自体は全国的にも先進的な取り組みと理解できるものであった。

つまり、びわ湖ホール舞台技術部は、全国の劇場舞台技術者対象の技術研修をさらに充実させたいと企図し（実演される上演作品に一般者が直接参加できるスタイルの研修会は珍しく、リピートする研修者もいる）、そのために「びわ湖ホールシアターメイツ会員（子どもとその保護者）」向けのバックステージツアー用の面白い演劇作品を新しく創作する（やはり毎年のリピーターが多く、同一作品の上演を繰り返すには限度がある）と方針を定め、そして、地域の学生に関わってもらって「劇場における地域の活性化」を実現したい、と提携あるいは連携の呼びかけを始められた訳である。

（三）当プロジェクトの3つの与件

整理すれば3つの与件（技術研修の充実、ツアー用演劇の新創作、学生参加による劇場活性化）が示されたこととなる。舞台芸術学科としては「子どもたち向けの（劇場現場的にリアルな）実演作品の創作上演に、学生たちが舞台美術デザイン及び製作、出演、進行スタッフなどとして参加する」事業（授業）案と受けとめ、可能性の検討を始めた。「劇場現場的にリアルな実演作品の創作」の実現は困難と思われたのだが、すでに連携大学として成安造形大学が2年間の協力実績を持っていたことは前向きな判断材料となり、二〇一四年四月締結に向けて連携をとり結ぶこととなった（諸規定により、びわ湖ホールおよび各大学間での具体的な協働関係が構築できないため、提携とせず連携として合意形成を図った）。

（四）劇場現場的にリアルな実演作品の創作

びわ湖ホール舞台技術部、成安造形大学、本学舞台芸術学科、三者の劇場現場のイメージ（必要とする研修あるいは授業の環境）はそれぞれ大きく異なる。びわ湖ホール舞台技術部が実現したい現場イメージは、演出家の指示の元で各技術セクションが知恵やノウハウを駆使し限られた時間と場所で最大限の創造活動を展開する、というもの。成安造形大学（空間デザイン領域ファッションデザインコース）の要望は、劇場空間の拡がりと照明音響さらに舞台美術によって視覚化される非日常的でファンタジックな時間の演出を学生たちが体験できるということ。本学舞台芸術学科舞台デザインコースとしては、学生たちが機械化された舞台機構の運用を目の当たりにし、また大規模な照明音響設備に実際に触れる機会を実現することが大切だと考えていた。

そのため、当初、びわ湖ホール舞台技術部からは「主舞台を囲む袖舞台と奥舞台に、それぞれ小さな演劇作品を用意する。びわ湖ホールシアターメイツ会員たちはホール内を回遊しながらバックステージを見学し、それぞれの演劇を鑑賞する」という形式での企画を提示されたが、実上演まで一年を切っての新企画案は時間的な制限もあって立ち上がりを待てず、二〇一三年度と同等内容での実施と決まった。お話は「俵藤太」の物語、滋賀県湖南地域に伝承される昔話に親しみやすい道案内キャラクターを登場させて、子どもたちも一緒に敵役の「大ムカデ」をやっつけるとの冒険譚。途中にさまざまなアトラクションを仕掛けて、楽しくびわ湖ホールの裏側を体験する90分の内容である。ごま氏が主宰する劇団ニットキッャプシアターからの出演者、振り付けや作曲スタッフも引き続き参加されることとなった。

初年度事業内容は、本学舞台芸術学科、びわ湖ホールとの連携覚書にまとめられている。

舞台芸術学科舞台デザインコース授業（当時2回生対象の舞台デザイン基礎、3回生対象の表現演習）に4度の学外特別授業を準備。実施スタイルはびわ湖ホール大ホールを会場にびわ湖ホール職員の方を講師とした合同学習会。また合同授業後の時間を利用するなどして顔合わせや企画説明、参加希望学生の役務相談を行い、翌年二月の演劇上演に備えていく。

ただし、本学の学生たち全てが演劇上演に参加するわけではない。主な理由は2点。京都市内からの授業期間中の交通費は学外授業として学科予算からの補助を充てることができたが、授業期間外の公演週にはその補助が出ず学生の個人負担となること。そして公演週が授業期間外であるため学科専門科目としては出席の強制ができず、単位認定もないことである。

実際には結果として、少人数の希望者だけが技術研修を受講する舞台技術者たちと共に一本の劇作品を上演することとなった。前述した課題「劇場現場的にリアルな」実演作品への創作上演、つまり劇創作への参加を促す取り組みは次年度に持越された。ちなみに、劇創作への参加を促す取り組みと予算（学生の移動交通費）については、次年度以降現在でも課題のまま今に至っている。

二、二〇一四～一六年度の活動

（一）二〇一四年度の授業展開

①　当時の授業資料に基づく授業の経過

二〇一四年度（初年度）の活動経過を報告するにあたり、まずは当時学生たちに配布した資料を紹介する。

●授業内容「劇場の制作と創作」について

この学外授業ではリアルな劇場運営の躍動感や、制作業務に社会性が不可欠

な様子を見聞きします。

演劇やダンスなど作品の内側ばかりでなく、劇場というその上演の環境を整える作業も意識し、さらに劇場を取り囲む人々・地域・自治体などにまで拡がる、その芸術活動の大きさを学びます。

また芸術創作の頂点に立つ人物達は、多くの助力者や補助役、スタッフに囲まれて、彼らと共に現場を創り上げていく。その創造的な雰囲気の現場から、芸術作品の上演が用意される、との劇場作業の展開、流れ方を実地に経験する機会を設けます（びわ湖ホール舞台技術研修に参加することができます）。

制作×2回

五月二三日（金）村井部長「びわ湖ホールについての概要」
企画立案●びわ湖ホールという地方自治体立の劇場の使命（ミッション）
予算調整●予算及び助成金に関する状況（新聞記事などで予習可な範囲）
日程確認●貸し館業務などと芸術監督制のあり方、特に日程の決まり方
座組手配●上記関わりの中でプロダクションを用意する際の具体的な仕事

六月一三日（金）舘脇チーフ「自主事業制作について」
制作進行●制作の仕事にはどのような気配りや手配が必要なのか
広報集客●広報や場合によっては宣伝など、集客のための作業
上演実施●上演を実施するその当日の制作作業の様々
公演清算●公演終了後の後片付け、中でも清算業務の必要性について

創作×2回

一〇月一七日（金）村島主査「オペラ公演が出来るまで」
演出の仕事●演出家は劇場スタッフにどのような依頼をし指示を出すのか
予算の配分●限られた予算を、演出家の希望が叶うように配分できるのか
美術と衣裳●デザインと製作の発注のされ方、予算内で収める工夫
音楽と稽古●オペラの稽古進行、音楽稽古の進め方、オーケストラのこと

一〇月二四日（金）押谷チーフ「技術研修に向けて・見学等」
専門劇場●一九八〇年代までの多目的ホールと現代の専門劇場、その違い
劇場法●文化施設としての劇場（劇場、音楽堂等の活性化に関する法律）
四面舞台●びわ湖ホールの舞台機構、オペラ運営のための四面ステージ
舞台の安全●技術者の姿勢、安全衛生と具体的な事故防止対策について

---

② 二〇一四年度技術研修の内容

二〇一四年度技術研修に参加した学生たちは合同学習会で得たびわ湖ホールの運営方針、自主事業、制作演出、機構設備の知識を手がかりに、両立の難しい2つのコンセプト「安全」と「楽しさ」を実際に体験し、そのバランスの精妙さをも経験することとなった。

安全は、劇場内で毎日繰り返される打ち合わせと危険箇所確認、出演者を交えたリハーサルと、その後の手直しで獲得されていく皆の自信に裏付けられる。さらに、参加者互いの作業を認識して、不明点を無くしていく各自の努力も不可欠である。月曜から始まり公演日土曜の前日ゲネプロまで続く仕込み作業を通じて、安全に対する緊張感を全員で学んだ。

その長時間の緊張を乗り越えて、本番終了後の参加した「びわ湖ホールシアターメイツ会員」の子ども達が、晴々とした明るい歓声とうれしそうな笑顔に出会う楽しさに努力が結実する。学生たちも本番を無事に乗り越えた安堵感、努力が報われた解放感が相まって皆も笑顔になることを知った。

技術研修の概要は添付図1のとおり（研修参加者募集チラシ）。全6日間の流れ、4つのコース（舞台機構・舞台進行・舞台照明・舞台音響）に共通する部分は次の通りである。

二〇一五年二月

九日（月）

開講式、企画趣旨説明、作品演出意図講義（図2）
講習1　作曲意図説明、舞台進行説明、各コースに分かれて概要説明
意見交換会

一〇日（火）

講習2　全体ミーティング、各コースに分かれて仕込み

講習３　各コースに分かれて仕込み
意見交換会

一一日（水）
講習４　全体ミーティング、各コースに分かれてリハーサル準備
講習５　リハーサル準備
意見交換会

一二日（木）
講習６　全体ミーティング、リハーサル準備続き
講習７　テクニカルリハーサル実習
意見交換会

一三日（金）
講習８　全体ミーティング、場当たりキッカケ確認、手直し
講習９　通しリハーサル
意見交換会

一四日（土）
講習１０　全体ミーティング、手直し、確認
開場準備、開場、成果発表
意見交換会、閉講式

毎日のはじまりの全体ミーティングと終わりの意見交換会の前後には技術的な調整や劇団員の自主稽古があり、そのために各日の開始と終了時刻は１時間程度の幅で日替わりしていたが、基本的には１７時半には終了し、１８時には解散していた。そのため技術研修に参加していた二〇一四年度の学生たちが余り遅くまでホールに留まることはなかった。

③　二〇一四年度のまとめ

この初年度事業が何も知らぬ学生たちを交えて安定的に運営されたのには、これまで事業を積み重ねて来られたびわ湖ホール舞台技術部のノウハウと、さらに特筆すべきは演出及び出演を担当されている劇団ニットキャップシアターの皆さんの「歩く劇場愛」ともいうべき姿勢、そして上演に対する献身が大きい。

子どもたちを主な観客に据え、危険な箇所もある劇場の舞台裏を案内して導くには、幾つもの入念な準備が必要である。物語とお芝居で子どもたちの興味をそらさない工夫（飽きればどこか別の場所に駆け出して行ってしまいかねない）、適切な明るさと音楽やセリフの音量ボリュームの確保（暗すぎたりすると泣き出したり、点滅光の刺激は視覚に悪影響を与える。大きすぎる音は恐怖感につながるし、パフォーマンスの音声が聞こえにくくければ内容が伝えられない）、出演者とスタッフの曖昧な境界線を敢えて設定する演出が「お話」と「バックステージ」を滲ませ、現実とフィクションの混ざり合う「劇場」を体感させる。

劇場はとても楽しい場所、様々な世界に出会える場所、何度も何度でも訪れるに値する場所なのだと信じている大人たちが沢山いて、そんな大人と子どもたちが出会う場所という実感を誰にでも味わってもらうことができる。

初年度はプロジェクト形式ではなく学外授業と課外活動の組み合わせであったために、学生たちには確かに、もっと参加したいとの気持ちが芽生えた。来る次年度の、ごまのはえ氏＆ニットキャップシアターの皆さんとの作品創作に参加する下地作りの一年間となった。

（二）　二〇一五年度
全学プロジェクトへの展開

連携協定二年目となる二〇一五年度、びわ湖プロジェクトは舞台芸術学科の枠を飛び越えて全学的な活動へと展開し始めた。この二年目の大きな特徴である舞台芸術学科以外からの学生参加とその影響について、コーディネートを担当した筆者（北村）から報告する。

びわ湖ホールプロジェクトの全学展開は、連携一年目を終えた直後の二〇一五年二月に岩村先生から相談を受けたことから始まった。筆者の所属するプロジェクトセンターでは、企業・自治体などから寄せられる実際の課題に対して学生たちがアート・デザインの「仕事」として解決にあたるという、芸大ならではの産学連携活動を行っている。教員を通じて依頼・相談を受けること

も多く、今回もその一つであった。岩村先生からの相談には、連携協定の全学展開という前向きな要望と同時に、舞台芸術学科内では単位認定ができないといった課題も含まれていた。学外との連携の全学展開や、教育プログラムの精緻化はまさにセンターの担う役割と合致している。なかでもキャリア創出科目のプロジェクト演習として展開する「リアルワーク・プロジェクト」では、多学科・多学年からの公募参加を重視しており、異なるスキルや考え方をもつ学生同士のグループワークが、仕事としてのクオリティ向上と参加学生の学習促進の両方に効果をもたらしている。そこで、びわ湖ホールという本物の劇場での体験を広く学生たちが享受できるよう、岩村先生とともにプロジェクトの設計を行っていくこととした。

二〇一五年度の実施体制は以下の通りである。リアルワーク・プロジェクトは演習科目であるので、その指導教員を岩村先生とし、プロジェクトセンターの担当職員を筆者（北村）が務めた。また教員のアシスタント役を務める学生TAは前年度びわ湖ホールPJ経験者の舞台芸術学科3回生2名に依頼した。びわ湖ホールの技術研修実施体制は変わらず、同ホール舞台技術部が運営を行い、劇団ニットキャップシアターが作品製作を担った。本学との情報共有・連絡の窓口役はこの研修運営の中心的存在であるびわ湖ホール押谷氏に務めていただいた。なお、公演で扱うのはこれまで同様の俵藤太のムカデ退治のお話であることは当初に決められていた。

② 二〇一五年度プロジェクトの進行

プロジェクトは以下の日程で進行した。

二〇一五年

五月下旬　募集告知開始
六月二八日　びわ湖ホール見学会
本学からは15名が参加。彼らがほぼそのままプロジェクトに参加した。
七月二八日　PJキックオフミーティング。
学生と教職員の顔合わせと、今後の予定共有。
PJ演習の履修登録。欠席者のために同内容を三〇日にも実施。
八月六日　オペラ「竹取物語」GP見学
九月二日　劇作演出家・ごまのはえ氏との顔合わせ（図3）
九月中　演出プラン検討（グループワーク）
十月四日　演出プレゼンテーション
技術研修キックオフミーティング（びわ湖ホール）
十～十二月　ごま氏の台本に基づき演出プランの再検討
十二月二〇日　全体ミーティング（びわ湖ホール）
一月　担当シーン別に学内制作。出演者は稽古。
二月　技術研修期間中はびわ湖ホールにて制作活動と稽古。
そしてGP・本番

リアルワークPJの内容は作品制作や商品開発など多岐にわたるが、進行にはある程度共通点がある。すなわち、チームビルディングと基礎情報のリサーチから活動が始まり、企画や制作物の構想とクライアントへのプレゼンを経て、実際の制作や企画準備から本番に至るという流れである。このびわ湖ホールPJも十月四日の演出プレゼンまでを初期、そこから二月までを中期、そして技術研修の6日間をクライマックスとする流れとなっていた。

プロジェクト開始前には、舞台芸術学科以外の学生はびわ湖ホールの存在も連携の事実もほとんど知らないと想定し、プロジェクトの募集告知とホール見学会をセットで周知して関心を集めるよう工夫した。そうして、後述するように複数の学科からホール見学の参加者が現れ、その学生がほぼそのままPJにも参加してくれた。

前期の課題がひと段落した七月末にプロジェクトはいよいよキックオフを迎え、ここから十月四日までの活動初期は演出提案の作成である。メンバーが思い思いのアイディアを持ち寄り、共通点などをもとにグループをつくり検討を進めた。プレゼン当日の朝まで資料の準備に追われながらも、脚本を担当するごまのはえ氏やホールスタッフ、同じく協定校として参加する成安造形大の教員・学生を合わせた約50名に向けて堂々と、ちゃっかり笑いもとりながら自分たちの提案を伝えた。（図4）

その後、ホール見学などのイベントをはさみつつ、ごま氏からの完成台本に基づき本番に向けたチームづくりが行われる。本学からの参加メンバーは物語の各シーンに2～3名ずつ役割が当てられ、かつ一部のメンバーは役者として出演することとなった。二月の本番期間まで、このグループによる美術制作や

稽古が続けられた。

二〇一六年二月一五日に技術研修初日を迎え、いよいよホールでの制作と稽古が始まる。スタッフ・受講生・連携大学による朝礼を終えた後は、制作場所である中ホールで天井照明の仕込み（星の工場）や大型の舞台装置「ペリアクトイ」の制作、滋賀ならではの「飛び出し坊や」の量産など、大小様々な装置や小道具をホール舞台技術部のスタッフの指導のもと作り続けた。また出演学生は同時に稽古も行った。（図5～7）

そして一九日のゲネプロ（GP）、二〇日には本番を迎える。最終的には制作のみの予定だった学生にも飛び出し坊やを動かす役割が与えられ、観客の親子約100名の前で全員が本番の舞台に立つこととなった。大ホールの奈落からオーケストラピット、搬入口まであらゆる場所を使ったバックステージツアーは盛況裡に終了。無事、プロジェクトを終えることができた。（図8・9）

びわ湖ホールプロジェクトの活動はこの本番公演がクライマックスであるが、すべてのリアルワーク・プロジェクトには演習科目としての振り返りプログラムが用意されている。そこで本番終了後にホール控え室にてレポート課題を提示。春休み明けの提出をもって半年以上にわたるプロジェクトは終了となった。

③　学生の構成と活動の実際

びわ湖プロジェクトには15名が応募。途中1名が学科課題との調整もあって離脱し、参加者は14名となった。内訳は表1の通りである、

表1　二〇一五年度プロジェクト参加学生内訳

	1回生	2回生
舞台芸術学科	4名	4名
映画学科	2名	
情報デザイン学科	1名	
マンガ学科	1名	
アートプロデュース学科	1名	

14名中5名が他学科生、また14名中10名が1回生となった。リアルワークPJは毎年15～20本程度行っており、大半がこのPJと同様に1・2回生の参加が多くなっている。また空間演出や商品開発など、テーマに応じて学科の偏りも多かれ少なかれ生じている。その意味で、明らかに舞台芸術学科生向けの本PJに他学科から30％以上の参加があった点は、全学展開の初年度としては順調といえる。

他学科生の応募動機として、すべての学生が演劇への関心が高いと述べていた。と同時に、子どもを対象としたイベントであることやデザイン力や表現力を活かせるチャンスがあることにも期待を寄せていた。そして何より、日本有数の劇場でのプロジェクト活動に魅力を感じていたようである。

そうした積極性も奏功してか、他学科生が臆するようなシーンはほとんど見られなかった。同じ舞台初心者である1年生が多かったことや、最初のホール見学から同一行動をとっており予備知識や経験値に大きな差がなかったことも理由と考えられる。実際のチーム分けでは、舞台装置のペリアクトイと天井照明（星の工場）はいずれも舞台芸術学科生のみによるチームとなった一方、美術装飾が中心のボーヤワールド（飛び出し坊や）や水中シーンの影絵では学科関係なくチームワークが進んだ。重要な小道具制作を情報デザイン学科生が担うなど個々の学生の特性に応じた活躍も見られた。映画学科の2名も、出演者としてしっかりと役割を得ていた。

舞台芸術自体がグループワークなくしては成り立たない総合芸術であるから、このように個々の学生が専門の域を超えてポジションを見出すことは当初から予想はしていた。一方で、全ての学生に参加のチャンスを与えるリアルワークPJにとって、本物の劇場で舞台づくりをするこの活動は他学科生には難しいのではないかと懸念もしていた。劇場は専門用語が飛び交い危険な装置と隣り合わせの現場である。観客としては何度も足を運んでいるだろうし、春秋座には慣れているかもしれない。それでも、舞台裏など足を踏み入れたこともなければ知識もない学生にはハードルが高いのではないかと考えたのである。

結果的に、このような懸念は杞憂でおわった。上述のように参加した学生は掛け値なしに意欲的で真剣に取り組んでいた。と同時に、技術研修として多数の劇場運営初任者を受け入れるホール側の安全管理は徹底されており、情報共有やコミュニケーションにも不足はなく、教職員は安心して現場に送り出すことができた。こうした良質な学習環境が学外にも保障されているというのは、連携協定の大きな効果ではないだろうか。また、チームごとに分かれて作業して

いるなか、現場経験の豊富な学生ＴＡ２名が駆け回り、学生同士あるいは学生と劇場スタッフのコミュニケーションを活性化する役目に徹していた。学生たちは、そうした多くのプロの目が行き届くなかで存分に制作や稽古ができたようである。

④　学生自身の言葉から

二〇一五年度の報告の最後に、上述の振り返りレポートから４名の学生の言葉を紹介したい。このレポートでは、①自身の役割や仕事を振り返り、できたこと／できなかったことから今後の課題を考察すること。②このプロジェクトがもたらした影響（成果）をふまえ、アートが社会に果たす役割を考察すること。以上大きく２つの問いが設定されている。なお、この設問はプロジェクト演習すべてに基本的に共通しており、自身の経験の言語化を通してキャリア形成の一助となることを意図している。

註：引用文中の（…）は中略。また明らかな誤字は筆者が改めている

（1）　デザイナーを務めるにあたって一番大切なことを学びました。どの業界でのデザイナーでも、発注の意図に沿った枠組みを基に構成することが肝心です。（…）しかし、私は（…）良かれと思いデザイン案を練り直してしまいました。この時、必要であったのは「新しい提案は必ず先に伝えること」「デザインは早い段階から目を通してもらうこと」だと考え直しました。実際に仕事をされている方との製作であったからこそ気づけた間違いであったと思います。（…）これを踏まえてこれからの製作の場では、コミュニケーションを取りあい作業量を把握して臨みたいです。また、デザイナーとして引き受けた仕事に責任を持ち、デザインは一人で仕上げられるものではないことを念頭に置いて、時間内にクオリティの高い物を構想できることを目標にします。

（2）　今回のプロジェクトを通して一つの舞台を大勢の人たちが動いて作り上げる感覚を学び、その中で本当に色んな発見をしました。本物の仕事としての作品には私が思うよりずっと厳しい制限や条件があって、それでもたくさんの人がその制限の中でより良いものを作ろうとしている様子には、学生同士の製作にはないような現実的な緊張感と真剣味があったように思います。技術研修に参加していた人達も含めて、色んなタイプのプロフェッショナルの方々の仕事を間近で見られたのも良い刺激になりました。

（3）　一番印象に残っているのは二回目の（…）プレゼンテーションだ。（…）書き上げられた台本を基に、私たちがデザインや演出案を提示するというものだった。この時は（…）技術部のスタッフさんたちとたくさん言葉を交わすことができた。その時のスタッフさんたちの、私たちの案をどう具現化していくかの話し合いがとてもスピードが速かったことを覚えている。どんどん出てくる具現化のアイディア。そのスピードもそうだけど、一番覚えているのはその話をしているスタッフさんの顔。ワクワクしている顔が、横で見ているだけでなんだか嬉しくなったのを覚えている。楽しいんだな、好きなんだな、というのを間近で感じられた瞬間だった。これこそがクリエイションの現場なのだと私は感じた。

（4）　舞台を作りたいという人と、観たいという人、そしてその人達が集まれる場所がないと舞台は形にならないと思います。どちらかが一方的にやりたい、観たい、と思っているだけではアートのある空間は生まれることができないと感じます。アートが社会に果たす役割の一番の柱となるのは（…）気持ちを揺さぶりあうことだと思いました。その手段として舞台があり、美術作品があるのではないでしょうか。何らかの手段を用いて他者と関わることが、アートの根っこにあるのだと感じます。だから、舞台の照明を当てて終わり。音を流して終わり。装置を作って終わり。観劇して終わり。という風になってはもったいないです。舞台を作っている先にいる人のことや、舞台を観ている先にいる人のことを少しでも考えられるような空間が、アートというものを感じさせてくれるのだと思います。

デザイナーという立場ならではの失敗とそこから見出した目標。プロとともに取り組む現場だからこそ味わうことができた緊張感と真剣さ。そして、プロは仕事を楽しんでいるという真実。あるいは、アートにおける作り手と受け手との関係性やコミュニケーションについての実感。ここに紹介した４名は学科

も学年も異なっているが、どれも分野の垣根を超えてアートやデザインに共通する学びを得ていたようである。さらに言えば、これらはアートやデザイン分野だけでなく全ての仕事をする上でも重要な「社会人としての基礎」にも通じるものである。もちろん彼らは普段の授業の中でもこうしたことを折に触れて耳にし、学んでいるはずだ。それを、びわ湖ホールというプロの現場で行ったプロジェクトを通して再認識できたのだといえよう。

このように、二〇一五年度のびわ湖ホールプロジェクトは前年度同様の高い学習効果を示すと同時に、舞台芸術学科以外の多様な学生にも同様の効果をもたらすことを明らかにすることができた。

（三）二〇一六年度　プロジェクト規模の拡大と発展

①　プロジェクトとしての継続

連携協定三年目の二〇一六年度では昨年度同様、舞台芸術学科外からの学科の学生も参加し、約４０名で取り組むこととなった。どのような経緯で本プロジェクトが規模拡大と発展に至ったのかを、記述する。

まず二〇一六年度の実施体制について述べる。指導教員を岩村原太先生、田中伸幸先生、ごまのはえ先生とサポート体制をかためた。プロジェクトセンターからは筆者（濁川）が職員として担当した。学生ＴＡには前年度びわ湖ＰＪ経験者の舞台芸術学科３回生２名を抜擢し、制作側サポート、出演側サポートと割り振りを決めて教職員陣のアシスタントを務めてもらった。びわ湖ホールの技術研修実施体制は、舞台技術部が運営を行い、劇団ニットキャップシアターが公演制作を担った。本学との情報共有・連絡の窓口役は運営にびわ湖ホール押谷氏に担当していただいた。そして学生達を中心に新作「アンデルセンの旅」成果公演に向けて進めていった。

②　プロジェクトの進行

プロジェクトは以下の日程で進行した。

二〇一六年

五月下旬　募集告知開始

五月二九日　舞台基礎講習（びわ湖ホール）

本学からは１９名が参加。彼らがほぼそのままプロジェクトにも応募した。

六月一五日　びわ湖ホール大ホール見学会

七月一九日　プロジェクトキックオフミーティング　メンバーの顔合せ、年間予定の共有、ＰＪ演習の履修登録の説明を行った。

七月中　チーム分け・アイディア出し

八月五日　オペラＧＰ見学（びわ湖ホール中ホール）

九月二四日　技術研修キックオフミーティング（びわ湖ホール）

十月三〇日　プレゼンテーション（びわ湖ホール）

十二～一月　担当シーン別に学内制作。出演者は稽古

二月上旬　制作・稽古の仕上げ期間

二月一三日　びわ湖ホールにて公演準備とリハーサル（～一七日）

二月一八日　公演本番

五月下旬に、びわ湖ホールサポートプロジェクトの募集説明会を開催した。応募期間を長く設け、その間に行われる舞台基礎講習・大ホール見学会に自由参加してもらうことでプロジェクトへの関心を強く持ってもらうことをねらいとした。その後のキックオフミーティングでは、本プロジェクトに関わるメンバーの顔合わせ、そして改めてこのプロジェクトの予定を伝える回となった。

ここからいよいよ活動が開始する。はじめに指導教員でもあり、今回の「アンデルセンの旅」の脚本を担当するごまのはえ先生から、公演内容について学生達に詳しく伝えられた。この作品は大ホールの各所で演じられる、アンデルセンの執筆した作品をツアーで巡る体験型の音楽劇である。オープニングは客席から始まり、エピローグが展開される主舞台、人魚姫の前半部分の奥舞台、中盤は奈落、後半部分は盆の上、雪だるまのお話の搬入口、みにくいアヒルの子の下手舞台、親指姫の舞台裏の廊下・階段・オーケストラピット、最後の真珠とマッチ売りの少女の上手袖、そして再び客席へと戻り、クライマックスを鑑賞するという流れだ。

九月と十月のプレゼンまでは学生達の取り組みたい演出・アイディアを持ち寄り、発表、ブラッシュアップの繰り返しだった（図10）。本学からのアイディアは全て採用となり、あとはいかに実現するかが課題となった。十二月から一月は学内の教室を使用しての制作を行った。現場での作業量削減のためほぼ完成の状態まで仕上げ、二月一三日からの現場入りではパーツの合体や取り付け

のみにするという計画のもと進められた（図11）。また出演者の稽古も学内外で連日行われるようになる。二月に入ると学生達のモチベーションも高まった状態での小屋入りとなった。

迎えた18日。公演本番では、リハーサル以上の成果を見せ、お客様に喜んでいただける結果となった。本番終了後のミーティングと懇親会では、ひとりひとり感想を発表、びわ湖ホールから表彰も頂いた。この数ヶ月の活動と公演での経験を、レポート課題というかたちで振り返り、プロジェクトの幕は閉じた。

③　学生の構成と活動の実際

びわ湖プロジェクトには43名が応募。活動をしていく中で、内5名が学科課題との調整もあって離脱し、参加者は最終的に38名となった。学科の内訳は以下の通りである。

表2　二〇一六年度プロジェクト参加学生内

	1回生	2回生	3回生
舞台芸術学科	21名	1名	1名
映画学科	1名	4名	
情報デザイン学科		2名	1名
マンガ学科	1名	2名	
アートプロデュース学科	2名		
こども芸術学科	2名		

人数が大幅に増加したことと、学科学年のバリエーションも増えたことが昨年度と比較して大きく変化した点である。

プロジェクト活動当初は経験が豊富なTAや3回生、そして前年度の経験者が1回生やプロジェクト全体を牽引する構図が見られたが、時間や経験を重ねていくにつれて1回生も自らチームリーダーとなり、引っ張っていく様子が展開された。転換点としてあげるならば、十月プレゼン後だろうか。特に制作開始までの準備、予算の調整、資材の発注では、自分達の思い描くものを実現していくために積極的に行動する姿が多く見られるようになっていた。

制作では場所別に分かれた5チーム体制で進められた。「高いクオリティのものを仕上げること」はもちろんのこと、「現場入りでの作業を最小限にするために、完成に近い状態まで仕上げること」を見事クリアし、舞台美術の分業制をきちんと整えることができた。

一月から稽古が始まり、出演者達も自分に与えられたキャラクターの実現に奮闘するようになる。今年度は舞台芸術学科以外の映画学科、こども芸術学科からも出演者が選出された。また、ツアーガイド役をプロの俳優だけではなく本学の学生に任せられるようになったことも大きな進歩のひとつだ。お客様である子ども達に楽しんでもらえるよう、コミュニケーションを取りながら次の場所へと導く学生ならではの関わり方をしていた。

二〇一六年度びわ湖ホールサポートプロジェクトでは、学生の人数だけでなく専門分野も増えたことで刺激のある学びができ、自らの成長を促し、そしてさらに次へと続く実りのある成果が多く残せたのではないだろうか。

三、これからのびわ湖ホールプロジェクト

地域文化行政の一端を担う公共ホールと3つの私立大学が連携して協働する教育機会として捉えれば、このびわ湖ホールプロジェクトの「これから」はさらに興味深い。二〇一四初年度は舞台芸術学科の学科内授業、二〇一五年度にプロジェクト事業となり舞台芸術学科生と他学科生が劇場現場で出会うチャンスを得た。二〇一六年度には立命館大学映像学部との交流も始まり、二〇一七年度はさらに具体的に大学の枠組みを超えての協働創作が目論まれている。各大学の得意領域にて学生たちが交歓するばかりでなく、地域をベースに活躍する舞台芸術家たちも加わり出演者のレベルアップを質・量ともに図るオーディションの実施、また、ダンスのみの出演者募集を始めると同時にワークショップやレッスンもスケジュールに入ることになった。このように連携協働の活動は技術者養成の新しい方法論を試すにとどまらず、ホールイベントの意義、大学教育の枠組みを問い直しながら、年々の内容が益々進化していく。

その原動力であるびわ湖ホール舞台技術部のプロフェッショナルたちは、新人に接すると同様に、自らの研鑽も兼ねて学生たちと創作を共にしてくださる。舞台芸術に親しみを持つ学生たちに実際の体験を提供しつつ、その姿勢は、新たな舞台芸術家として立とうとする学生たちを揺籃し激励する。筆者（岩村）は

その可能性の行方を期待している。

また、各地からの舞台技術者が集合して劇場作品の創作を経験する「技術研修」では、今現在もっとも普通の「悩み」と「解決」が提示される。学生たちがそれらのやり取りを通じて全国の舞台関係者、劇場職員と知り合い、業界を正しく理解するきっかけになれば良いと願う。

《図版》

図5　二〇一五年度・舞台装置「ペリアクトイ」の制作

図6　二〇一五年度・量産した「飛び出し坊や」の設置

図7　二〇一五年度・リハーサル。
大ムカデのパワーアップも学生が行った

図1　二〇一四年度・舞台技術研修チラシ

図2　二〇一四年度・ミーティング風景

図3　二〇一五年度・ごまのはえ氏と学生メンバーの顔合わせ

図4　二〇一五年度・びわ湖ホールでの演出案プレゼン

図11　二〇一六年度・学内で制作したセットの組み立て

図12　二〇一四年度集合写真

図13　二〇一五年度集合写真

図14　二〇一六年度集合写真

図8　二〇一五年度・本番風景。星球照明での演出

図9　二〇一五年度・本番終了後のお見送り

図10　二〇一六年度・３大学での打合せ